

特攻隊に捧ぐ

坂口安吾

青空文庫

数百万の血をささげたこの戦争に、我々の心を真に高めてくれるような本当の美談が少いということは、なんとしても切ないことだ。それは一に軍部の指導方針が、その根本に於て、たとえば「お母さん」と叫んで死ぬ兵隊に、是が非でも「天皇陛下万歳」と叫ばせようというような非人間的なものであるから、真に人間の魂に訴える美しい話が乏しいのは仕方がないことであろう。

けれども敗戦のあげくが、軍の積悪があばかれるのは当然として、戦争にからまる何事をも悪い方へ悪い方へと解釈するのは決して健全なことではない。

たとえば戦争中は勇躍護国の花と散った特攻隊員が、敗戦後は

専ら^{もっぱ}「死にたくない」特攻隊員で、近頃では殉国の特攻隊員など一向にはやらなくなってしまうが、こう一方的にかたよるのは、いつの世にも排すべきで、自己自らを愚弄^{ぐろう}することにほかならない。もとより死にたくないのは人の本能で、自殺ですら多くは生きるためのあがきの変形であり、死にたい兵隊のあろう筈^{はず}はないけれども、若者の胸に殉国の情熱というものが存在し、死にたくない本能と格闘しつつ、至情に散った尊厳を敬い愛す心を忘れてはならないだろう。我々はこの戦争の中から積悪の泥沼をあげき天日にさらし干し乾して正体を見破り自省と又明日の建設の足場とすることが必要であるが、同時に、戦争の中から眞実の花をさがして、ひそかに我が部屋をかざり、明日の日により美しい花を

もとめ花咲かせる努力と希望を失ってはならないだろう。

私はだいたい、戦法としても特攻隊というものが好きであった。人は特攻隊を残酷だというが、残酷なのは戦争自体で、戦争となつた以上はあらゆる智能方策を傾けて戦う以外に仕方がない。特攻隊よりも遙はるかにみじめに、あの平野、あの海辺、あのジャングルに、まるで泥人形のようにバタバタ死んだ何百万の兵隊があるのだ。戦争は呪のろうべし、憎むべし。再び犯すべからず。その戦争の中で、然しかし、特攻隊はともかく可憐かれんな花であつたと私は思う。

戦法としても、日本としては上乘のものだつた。ケタの違う工業力でまともに戦える筈はないので、追いつめられて窮余の策でやるような無計画なことをせず、戦争の始めから、航空工業を特

攻専門にきりかえ、重爆などは作らぬやり方で片道飛行機専門に組織を立てて立案すれば、工業力の劣勢を相当おぎなうことが出来たと思う。人の子を死へ馳かりたてることは怖おそるべき罪悪であるが、これも戦争である以上は、死ぬるは同じ、やむを得ぬ。日本軍の作戦の幼稚さは言語同断で、工業力と作戦との結び方すら組織的に計画されてはおらず、有力なる新兵器もなく、ともかく最も独創的な新兵器といえ、それが特攻隊であつた。特攻隊は兵隊ではなく、兵器である。工業力をおぎなうための最も簡便な工程の操縦器であり計器であつた。

私は文学者であり、生れついでにの懐疑家であり、人間を人性を死に至るまで疑いつづける者であるが、然し、特攻隊員の心情だ

けは疑らぬ方がいいと思つている。なぜなら、疑つたところで、タカが知れており、分りきつてゐるからだ。要するに、死にたくない本能との格闘、それだけのことだ。疑るな。そツとしておけ。そして、卑怯ひきようだの女々しいだの、又はあべこべに人間的であつたなどと言うなかれ。

彼らは自ら爆弾となつて敵艦にぶつかつた。否、いなその大部分が途中に射ち落されてしまつたであろうけれども、敵艦に突入したその何機かを彼等全部の榮譽ある姿と見てやりたい。母も思つたであろう。恋人のまぼろしも見たであろう。自ら飛び散る火の粉となり、火の粉の中に彼等の二十何歳かの悲しい歴史が花咲き消えた。彼等は基地では酒飲みで、ゴロツキで、バクチ打ちで、女

たらしであつたかも知れぬ。やむを得ぬ。死へ向つて歩むのども、聖人ならぬ二十前後の若者が、酒をのまずにいられようか。せめても女と時のまの火を遊ばずにいられようか。ゴロツキで、バクチ打ちで、死を怖れ、生に恋々とし、世の誰よりも恋々とし、けれども彼等は愛国の詩人であつた。いのちを人にささげる者を詩人という。唄^{うた}う必要はないのである。詩人純粹なりといえ、迷わずにいのちをささげ得る筈はない。そんな化物はあり得ない。その迷う姿をあばいて何になるのさ何かの役に立つのかね？

我々愚かな人間も、時にはかかる至高の姿に達し得るといふこと、それを必死に愛し、まもろうではないか。軍部の偽瀧^{ぎまん}とカラクリにあやつられた人形の姿であつたとしても、死と必死に戦い、

国にいのちをささげた苦悩と完結はなんで人形であるものか。

私は無償の行為というものを最高の人の姿と見るのであるが、日本流にはまぎれもなく例の滅私奉公で、戦争中は合言葉に至極簡単に言いすてていたが、こんなことが百万人の一人もできるものではないのである。他のためにいのちをすてる、戦争は凡人を駈^かつて至極簡単に奇蹟^{きせき}を行わせた。

私は然しいささか美に惑^{わく}溺^できしているのである。そして根^{こん}柢^{てい}的な過失を犯している。私はそれに気付いているのだ。戦争が奇蹟を行ったという表現は憎むべき偽懣の言葉で、奇蹟の正体は、国のためにいのちを捨てることを「強要した」というところにある。奇蹟でもなんでもない。無理強いに強要されたのだ。これは

戦争の性格だ。その性格に自由はない。かりに作戦の許す最大限の自由を許したにしても、戦争に真実の自由はなく、しよせん所詮兵隊は人間ではなく人形なのだ。

人間が戦争を呪うのは当然だ。呪わぬ者は人間ではない。否応なく、いのちを強要される。私は無償の行為と云いったが、それが至高の人の姿であるにしても多くの人はむしろ平凡を愛しており、小さな家庭の小さな平和を愛しているのだ。かかる人々を強要して体当りをさせる。暴力の極であり、私とて、最大の怒りをもつてこれを呪うものである。そして恐らく大部分の兵隊が戦争を呪ったにきまつている。

けれども私は「強要せられた」ことを一応忘れる考え方も必要

だと思つてゐる。なぜなら彼等は強要せられた、人間ではなく人形として否^{いや}応^{おう}なく強要せられた。だが、その次に始まつたのは彼個人の凄^{せい}絶^{ぜつ}な死との格闘、人間の苦惱で、強要によつて起りはしたが、燃焼はそれ自体であり、強要と切り離して、それ自体として見ることも可能だという考えである。否、私はむしろ切り離して、それ自体として見るのが正当で、格闘のあげくの殉国の情熱を最大の讚美を以て敬愛^{もつ}したいと思ふのだ。

強要せられたる結果とは云え、凡人も亦^{また}かかる崇高な偉業を成^じ就^{ようじゆ}しうるといふことは、大きな希望ではないか。大いなる光ではないか。平和なる時代に於て、かかる人の子の至高の苦惱と情熱が花咲きうるといふ希望は日本を世界を明るくする。ことさ

らに無益なケチをつけ、悪い方へと解釈したがることは有害だ。
美しいものの真実の発芽は必死にまもり育てねばならぬ。

私は戦争を最も呪う。だが、特攻隊を永遠に讃美する。その人
間の懊おのうくもん悩なや苦悶くもんとかくて国のため人のためにささげられたいのち
に對して。先ごろ浅草の本願寺だかで浮浪者の救護に挺身ていしんし、
浮浪者の敬慕を一身にあつめて救護所の所長におされていた学生
が発疹はっしんチフスのために殉職したという話をきいた。

私のごとく卑小な大人が蛇足する言葉は不要であろう。私の卑
小かかわさにも拘かわらず偉大なる魂は実在する。私はそれを信じうるだけ
で幸せだと思ふ。

青年諸君よ、この戦争は馬鹿ばかげた茶番ちばんにすぎず、そして戦争は永遠に呪うべきものであるが、かつて諸氏の胸に宿った「愛国殉国の情熱」が決して間違つたものではないことに最大の自信を持つて欲しい。

要求せられた「殉国の情熱」を、自発的な、人間自らの生き方の中に見出みいだすことが不可能であろうか。それを思う私が間違つているのであるうか。

青空文庫情報

底本：「墮落論」新潮文庫、新潮社

2000（平成12）年6月1日初版発行

2004（平成16）年4月20日5刷

初出：「坂口安吾全集 16」筑摩書房

2000（平成12）年4月25日初版第1刷発行

※「ホープ 第二巻第二号」実業之日本社、1947（昭和22）年2月1日発行に掲載予定だったが、GHQの検閲により削除された。テキストは、初出、底本とも「占領軍検閲雑誌」雄松堂（マイクロフィルム）による。

入力：うてな

校正：富田倫生

2006年4月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

特攻隊に捧ぐ

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>